

書評

Ronald L. Meek, *Social Science and the*

Ignoble Savage, Cambridge U. P., 1976. 249 pp.

小林 昇

いわゆる経済発展段階説については、これまで、フリードリッヒ・リスト以来のドイツ歴史学派に固有の概念装置としてしばしば論ぜられ、そういう論述にかかりつつ、アダム・スミスにもすでに段階説が見いだされるという指摘も、古くから行われていたのであった。⁽¹⁾

しかし、段階説に対するこういう問題の拡大のしかたをいわば裏返しにして、スミスにおける経済↓社会の発展段階の把握を、啓蒙思想の一つのいわば最終生産物として、同時に啓蒙主義が培った歴史主義の確固とした出発点として、理解しようとするところが、最近の学界に見られるようになった。若干の試論のあとでロナルド・L・ミークが公刊した著書『社会科学

と下等な未開人』は、このところみを代表するユニクな労作であり、わたくしの論説『国富論』における原始蓄積の把握について』(経済学史学会編『国富論』の成立)、岩波書店、一九七六年、所収)にもかわるところが多いので、それについての簡単な紹介と批評とを、以下にこのころみておきたい。

一見したところ異様な、この本の題名の説明からはじめることが、そこに解明されている問題の理解のために有効である。ここで「下等な未開人」というのは、おもに新大陸アメリカにヨーロッパ人が見いだした原始的な狩猟民や漁撈民のことであって、この本ではこれをアメリカ人と呼ぶことにしている。だから、高度な農業社会を建設してとうもうこしや馬鈴薯

などの多くの食料を人類にあたえ、ヨーロッパ人によって滅ぼされた、アメリカ大陸のいわば代表的な原住民——インカやアステカの人々——は、ここでは除外されている。啓蒙期のヨーロッパ人が一般にはアメリカ原住民を未開人と考えたことは、アメリカでの旧文明に対するヨーロッパ人の徹底的破壊のゆえでもあったであろう。ミークはこの点を論述の外に置いているが、この問題を別にすれば、アメリカの各地にさまざまな未開人（アメリカ・インディアンやエスキモーたち）がいたことはそれとして事実である。そうして、この未開人にわざわざ「下等な」という——本来はこのようにカッコでくくることが望ましい——形容詞をミークがつけたのは、ルソー流の文明社会批判とそれに結合する未開人へのモラルな讚美とが啓蒙思潮の本流でなかったこと、近代ヨーロッパ人が未開人の物質的環境と精神的水準とを劣悪だと認めていたことを、はっきりさせるという目的からなのである。

ミークがこの本で説明しようとすることは、新大陸の発見が「下等な未開人」の発見を伴ったという事実こそ、ヨーロッパ人の歴史観を一変させ、文化人類学的視野、社会の發展法則（と考えられたもの）の認識、やがては史的唯物論につながるころの、人間の物的生活環境と社会制度とのかわり——ここではモンテスキューは乗り越えられるにいたる経過点にしかすぎない——への注目、等をもたらしたとする経緯なのである（同時代のヨーロッパ人が、彼らの行う原始蓄積のために商品

として取扱ったニグロたちを、「アメリカ人」に対してどのように考えていたかについては、ミークのはっきりした説明はないようである。ただしアダム・スミスの『国富論』は、アメリカ原住民は狩猟段階をすでに脱していると指摘している）。

新大陸の発見までのヨーロッパ人の歴史観は、旧約聖書の記述を史実とするという点で統一されていた。これは旧約の記述の奥に史的事実を探ろうとする態度とはまったくちがって、近代科学以前のものである。そうして旧約の世界は、周知のとおり、牧畜民の社会を中心とし、その周辺にはエジプトやバビロニアなどの農耕文明があったし、そこには商業のいとままれる都市も存在した。またヤハヴェを信ずると否とを別として、すでに宗教は深く人間生活を規制していた。「過去という泉は深い」としても、その「過去」は広い意味でははじめからすでに文明社会であり、アダムとイヴとは文明社会の親だったのである。ところが、事実として発見された「アメリカ人」は、こういう旧約の世界の外にある人間であった。この発見のあたえたショックについて、ミークはつぎのように説明している。「ここでたいせつなことは、当時の人〔ヨーロッパ人〕たちにとって、アメリカ人の生活様式がヨーロッパのそれと隔たることの大ささは、記録に残る他のほとんどすべての原始的な人々の生活様式とヨーロッパのそれとの隔たりよりもはるかにいちじるしいと思われたということであって、この両者のいちじるしさは、それ自体、宗教や政府や社会組織についての多くの支配的

な考えに対する挑戦を行わしめねばやまないものだったのである。現代においてこれと相似た事例を考えてみようとしてもなかなかむずかしい。もしも緑いろの小人の種族があした火屋で発見されたとしても、われわれのあいだにこれほど大きい知的動揺がひきおこされることはないといつてよいであろう。そのうえ、この緑いろの小人の存在とわれわれの諸聖典とを和解させるという問題も、特別にむずかしい問題ではないであろう。知的なことがらの点で、われわれはすでにいわばこういっただの「小人」を将来発見することを聞かされすぎているのである。⁽⁵⁾

そうしてこういふつよいショックから、「原初には世界はどこもアメリカであった」(“In the beginning all the world was America.”)という思想が、みづから段階説の生成にかかわりのある、ジョン・ロックのことばにもとづいて生まれた。⁽⁶⁾それはすなわち、人類の原初一般の状態を牧畜状態以前に見ようとする思想であり、それはとくにラフィット(J. F. Lafitau)の『アメリカ未開人の風習』(*Moeurs des Sauvages Amériquains, comparées aux moeurs des premier temps, 1724*)において、右の原書名の後半部が示しているように、アメリカ人の出自を探る努力をつうじて文化人類学的関心の方向を開拓することとなった。ラフィット自身は「アメリカ人」がギリシヤ人

来住以前の原初ギリシヤの住民を起源とするという、荒唐な結論に達してしまっただけども、彼が研究の過程で人類の移動の

原因を経済的事情に求めたこと、しかもその際、狩猟・漁撈民、牧畜民、農民のそれぞれのばあいの区別を行ったことは、彼をしばしば引用した、一八世紀後半の社会科学者たちについて影響を及ぼしたと考えられるのである。⁽⁷⁾

ヨーロッパの知的世界におこったこういう新しい事態には、それを経済(=社会)発展段階説の形成にみちびくうえで、ほかの諸要因もまた働きかけたのであった。それはたとえ、自然的世界においても社会においても同一の原因は同一の結果を生むという、ロックの認識論の一面である。それが「アメリカ人」の発見という事実の側圧を受けつつフランシス・ベイコン↓グロティウス↓ホップズ↓ブーフェンドルフラを経由して徐々にまた素朴的に形成されつつあった四段階説にあたえた影響は、ラフィットの「アメリカ人」社会の研究とむしろ並んで重視すべきものであろう。

このようにして、一八世紀はその後半に入ると早々、ともに若いテュルゴとアダム・スミスとによって、四段階説を鮮明に——それぞれ独立に——確立するにいたつたのであった。すなわちテュルゴは、同時代におけるモンテスキューの『法の精神』(一七四八年)が示した風土決定論的思考の克服を意識しつつ、いくつかの試作のうちに書いた草稿『世界史論』(*Plan de deux Discours sur l'histoire universelle, vers 1751*)にいたつてこれを成熟させ、ノアの大洪水以後の人類社会の発展を描くにあつたつぎのような段階を示した。——

「狩猟民の状態」(これは「こんにちのアメリカの未開人」を示すところである)↓「牧畜という生活方法〔の状態〕」↓「農業状態」↓「商業のスピリット」[によって動かされる状態] (この最終段階は、農業の生む剰余に支えられて、都市、交易、職業分化、人間の不等等をつくるとされる)。そうしてここにはすでに、「△進歩▽」というものは通例、四つのことなる生活様式 (mode of subsistence) にもとづいた四つの継起的段階をつうじて、人知れぬ、しかし法則に支配された、社会発展のかたちをとる」という認識が明白に示されているのである。またスマスは、おそらくはその「エディンバラ講義」(一七五〇—一五一年)で四段階説の着想を示し、それが周知のように『グラスゴウ講義』(一七五二—一五三年?)および『国富論』第五編で成熟を見るにいたっているのである⁽¹⁰⁾。

スマスがスコットランドの学界における彼の四段階説のプライオリティーにかんしてとくに関心を持っていたことは、デュガルド・ステュアートの残した「追憶」から推測できるところであるが、ミークの判断によれば、それはスマスのこの学説がスマスの著書の公刊以前にはやく学界に浸透していて、ダーリンブルやケイムズがその著書でそれと相似のものを発表していたからであった⁽¹²⁾。この事情は、スマスがみずからの四段階説にあたえていた重要性を物語るものであり、また彼の四段階説はそれに値するものである、というのがミークの考えなのである。なぜなら、啓蒙の世紀の最終生産物であり・啓蒙思想と歴

史主義との接点に立つこの学説は、J・ウェイランドやリストを例外として、スマス以後の経済学の正統のなかでは早くに姿を没し、やがてマルクスにおいて蘇るべきものであるから。——もしも四段階理論という方法論を古代にも現代にも十分にあってはめようとするならば、△生活様式▽ (mode of production) の概念は、のちにマルクスが△生産様式▽ (mode of production) と呼ぶこととなった概念に変容しなければならないからである⁽¹³⁾。

以上がミークの新著の、わたくしの上掲の論説にかかわる点に重きを置いた、自由な紹介である。この新著が社会思想史に新しい窓の一つを開いたことは、わたくしの紹介によっても知られるであろう。ここにはまた、経済学史の研究者としても長い経歴を持つミークの円熟が感ぜられる。だが、それにもかかわらず、わたくしは——とくに上掲の論説の筆者として——このユニークな新著に対し、つぎの批判的なコメントを加えぬわけにはいかない。

第一、スマスがみずからの四段階説に対して重大な意義をあたえていたことがたとえ事実であったとしても、また『国富論』第五編はたしかにこの歴史理論を最終的なかたちで展開していることはまさしく事実であるけれども、それは『国富論』が到達した歴史把握の深奥ないし最高の到達点を示すものではなく、すでにわたくしが上掲の論説においても指摘したように、スマスは『国富論』第三編にいたって、テュルゴーに示さ

れたような当時の通念であった「世界史」のなかに西ヨーロッパ社会の發展史を嵌め込み、資本投下の自然的順序の理論を用いて、近代社会の成立の事情を、「理性の詭計」(List der Vernunft)への着目ともいえる弁証法的方法を示しつつ解明したのであった。農業社会が近代、商業社会に移行するにあたっては、商業の先行とそれ(↓貨幣経済)による旧農業社会(封建社会)の解体とが、またそれについて独立農民による農業社会の再出発が、必要であったという事実を、そこでミスは示したのであって、ミスは歴史認識においてマルクスにつなぐものは、たんに四段階説の「生活様式」論だけではなく、むしろこの、「生活様式」論の弁証法的方法による深化と、それによるヨーロッパ的近代↓「商業的社会」の個性的把握によるものというべきではないだろうか。

第二。したがって、『国富論』第五編が四段階説を終局的に定置させていることは、それ自体ミスの世界史把握の重層性を示すものではあるけれども、同時に、それが『グラスゴウ講義』第四部「軍備について」の部分の継承であるという事実からも、『国富論』の経済学の世界に組み入れられた、ミスの一方の法学的世界における歴史像の存在を物語るものであり、これをおなじ『国富論』第三編での新しい、西欧的世界史像に深めたところに、ミスの経済学のメリットがあったのではなからうか。したがってまた、四段階説の存在を強調することが、そこに立ち帰って重商主義=system of commerce=商業段階

とするような判断を生むにいたるならば、それは重商主義理解の退後であり、『国富論』の持った原始蓄積の理解の点での欠陥を、すなわちミスの世界史の最終章における欠陥を、かえって覆いかくすこととなるであろう。

第三。ミークの取扱ったような広い思想的パースペクティヴのなかでは、ドイツ歴史学派の諸發展段階説のごときは、大きい意義を担うことができな。このことをわたくしはふしぎとは思ないし、かろうじてウェイランドとともにその名をあげられたリストの經濟發展段階説が、啓蒙の一思潮の余波であることを悟らせるという点にも、ミークの新研究は貢献しているといえるであろう。しかしそのリストの五段階説が、後進国の産業資本の立場から——ミスへの批判をふくみつつ——前期的資本の反近代性を衝き、ミスよりも明瞭に「独占」と「保護」とを区別し、この後者に經濟的自由主義を結合させ、こうして重商主義の——⁽¹⁸⁾したがって結局は原始蓄積の——歴史的意義を把握しえたことを、われわれは無視したり看過したりすることができないであろう。段階説は、四段階説においては「生活様式」の概念をもって、その深化の一面である資本投下の自然的順序の理論においては近代社会成立史に示される弁証法の使用をもって、また(読者にはまだ奇異に聞えるかもしれぬけれども)リストの五段階説においてはミスが描かなかつた世界史の欠章——原始蓄積の意義の把握への接近をもって、それぞれマルクスの歴史的世界の成立に客観的に貢献しているの

である。

- (1) たとえば、高島善哉『経済社会学の根本問題』一九四一年、第二部第一章、とくにその一三三—三三六頁を見よ。
- (2) 『小林昇経済学史著作集』Ⅱに収録。
- (3) J・ハリスはインカ人についていさぎよく述べたことが、「これらの人民のなかにほんのわずかの技術しかなかったという理由で彼らを貧賤せざる者たちと見なすことは、たぶん許されないのである。彼らは立派な国を所有していたし、食料も、自分で満足に思うような衣服や建物も、たくさん持っていた。彼らには学問がなかったにしても、良い習俗と、誠実さで、最も文明の進んだヨーロッパ人も多くの点で模倣する値うちのある本式の政府とがあった」(Joseph Harris, *An Essay upon Money and Coins*, 2 pts, 1757—58, part 1, pp. 28—29. 筆者訳、ハリス『貨幣・通貨論』四〇—四一ページ)。
- (4) 作家トーマス・ペンの言葉。
- (5) Meek, *op. cit.*, p. 38.
- (6) Cf. John Locke, *Two Treatises of Government*, 1690, The Second Treatise of Civil Government, § 49.
- (7) 以上 cf. Meek, *op. cit.*, pp. 57 ff. たがハリスの蔵書にはランナーのこの本は見いだされなず。——スミス蔵書の内容に文化人類学的関心がよく示されてゐることは事実であるが。
- (8) Cf. Meek, *op. cit.*, p. 226.
- (9) *Ibid.*, p. 75. 傍点は小林のもの。——テュルゴアの『世界史論』が発表されたのは一八〇八年にわたつてであった(デュボアンによる『テュルゴア全集』)が、彼の『富の形成と分配』にかんする諸

考察』(一七六六年、一七七〇年に最初の公表)には四段階説をきかえたと見なしうる記述があるというのが、ミュータの判断である(*Ibid.*)。

- (10) わたしの上掲論説の第一節を見よ。
- (11) Cf. Account of the Life and Writings of Adam Smith. Read by Mr. Stewart, Jan. 21, and March 19, 1793, in *The Works of Adam Smith*, vol. I, 1812. なおその四五〇—ページに「理論的ならし推理的歴史」(theoretical or conjectural history)と題してゐる。四段階説はそれとそれとである。
- (12) Cf. Meek, *op. cit.*, pp. 110 ff.
- (13) Cf. *op. cit.*, pp. 223—24. マンハイムの『著書』で、John Weyland, *The Principles of Population and Production, as they are affected by the Progress of Society*, London, 1816 である。リストはこの本を読んではいながら書えられた。
- (14) Meek, *op. cit.*, p. 229. 傍点は原文のイタリック。
- (15) 前掲(13)の個所におけるマンハイムの推論は、それを受け容れざるにたゞ慎重を要するであらうか。
- (16) A W. Coats, Adam Smith and the Mercantile System, *Essays on Adam Smith*, ed. by A. S. Skinner and T. Wilson, 1975 はその例である。
- (17) 未開・牧畜・農業・農工工業・商業の五段階。
- (18) この論点についてはおしあつた。筆者訳、リスト『経済学の国民的体系』の訳者解説の、五四八—ページ以下を参照されたい。

(一九七六年六月)